

大学生の結婚観と子ども観

スポーツコミュニケーションゼミナール 1314068 吉田千夏

1. 研究動機・研究目的

日本では、かつては皆が結婚への意識が強く、特別な理由がない限り人生の中で結婚することが当たり前とする意識が一般的だった。しかし、近年では高い年齢に至るまで未婚に留まる人々が増え、結婚を選択的行為として捉える見方が広まっていると考えられる。

また、日本では出生する子どもの約 98%が婚姻関係である男女の間に生まれた子どもであることから、結婚年齢や生涯未婚率の上昇が、出生の数に影響を与えていると考えられる。

なぜ若者たちはこれほどまでに結婚から遠ざかるようになったのか。結婚というものが若者たちにとって望ましい選択ではなくなったのか、また結婚という選択を妨げる何らかの状況があるのだろうか。結婚適齢期の予備軍である、今の大学生の結婚についての意識を探り、これらを明らかにすることが研究の目的となっている。

2. 研究方法

「平成 22 年わが国の独身層の結婚観と家族観-第 14 回出征動向基本調査-」の質問項目を援用した結婚観についての質問紙調査を行った。

3. 主な結果と考察

最近の大学生がどのくらい結婚を望んでいるのかという研究を行ったが、一言で結婚を望むといっても、大学卒業後すぐには望んではないが将来的には結婚したいだとか、結婚したいと思う相手に巡り会えるかどうか次第だと考えている人もいるはずである。そうした結婚意欲の側面についていくつかの質問を用いて調査した。

いずれ結婚するつもりと答えた大学生は、結婚への意欲は高く、結婚する意思をもつ大学生男女のうち、ある程度の年齢までには結婚するつもりのもものが、結婚の内容を重視するものよりも、ある程度の年齢までに結婚すること自体を重視するものが多かった。

結婚することに魅力を感じてはいるが、独身生活にも魅力があると考える者がほとんどであることが分かった。結婚することの具体的な利点としては、男女とも「自分の子どもや家族を持てる」を挙げる人がもっとも多く、男性では「精神的な安らぎの場が得られる」を抜いて一番多い項目となっている。「親や周囲の期待に応えられる」は、男女とも 3 番目に多い。逆に女性では「現在愛情を感じている人と暮らせる」はやや少なく、「経済的に余裕が持てる」が多かった。独身生活の利点は、男女ともに「行動や生き方が自由」を挙げる人が圧倒的に多く、最大の魅力とされている。それ以外では「金銭的に裕福」「家族扶養の責任がなく気楽」「広い友人関係を保ちやすい」が比較的多い。これらの結果から結婚す

ると行動や生き方、金銭面、友人関係など束縛されるという感じ方が強いことが分かった。ただし女性では、男性よりも友人関係への束縛感は緩いことが分かった。

結婚をするときに気がかりになることとして、「お金を自由に使えるか」「余暇や遊びの時間を自由にとれるか」「生活スタイルの自由」が上位を占めた。これは、独身生活の魅力でもある「金銭的に裕福」「行動や生き方が自由」を意識する人の中で特に気がかりとされていた。

大学生が将来の結婚相手に求める条件について「学歴」、「職業」、「収入などの経済力」、「人柄」、「容姿」、「共通の趣味の有無」、「自分の仕事に対する理解と協力」、「家事・育児に対する能力や姿勢」の8項目についてそれぞれ「重視する」、「考慮する」、「あまり関係ない」の三択で質問している男女とも「人柄」を重視・考慮している人がもっとも多く、続いて「家事・育児に対する能力や姿勢」が多かった。女性では「経済力」「職業」を重視・考慮する人が多く、男性では「共通の趣味」を重視・考慮する人が多かった。一般独身者では、「仕事への理解」が男女とも多かったが、これはまだ社会人になっていないために、大学生にとっては考慮する部分とならなかったのかもしれない。

希望の子ども数について、男女に「あなたは、子どもは何人くらいほしいですか」という質問をしたところ、男性が平均2.34人、女性で平均2.42人という結果となった。希望子ども数の分布を見てみると、男女とも2人を希望する人が最も多く、続いて男性は1人を、女性は3人を希望する人が多かった。

大学生男女のライフスタイル(生活スタイル)について、消費行動、生きがいの有無、仕事と私生活のバランス、人付き合いの実態やそれらに対しての感じ方など当てはまるものを回答してもらい、さまざまな角度から調査したところ、男女とも「趣味・ライフワークあり」と「遊べる友人が多い」が6割前後で比較的高かった。また、「欲しいものを買うお金がない」と「仕事で私生活を犠牲」の割合も半数前後を占めている。男女で比較してみると、「衣服・持ち物にこだわる」および「仕事以外で旅行あり」の割合は女性の方が男性よりも15~16ポイント高く、「1人の生活をしていても寂しくない」の割合は男性の方が13ポイント高かった。以上の結果から「必ずしも結婚する必要はない」という考え方に賛成する人が少なからずいるが見てとれる。

4. 結論

結婚して一人前や、結婚するのが当たり前といったような社会的な圧力が弱まるとともに、結婚が家や親のためでもない個人を中心に据えたものへ変化する中で、結婚は人生の選択肢の一つとして捉えられるようになってきている。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究を進めるにあたり、指導教員の伊藤真紀助教の熱心なご指導に感謝いたします。また、アンケート調査に快くご協力してくださった大学生の皆様にご心から感謝致します。